

菊池寛 『恩讐の彼方に』 管見

——その材源と女性について——

李 志 新

はじめに

菊池寛は大正時代の有名な小説家、劇作家であり、雑誌『文藝春秋』を創刊して大成功を収め、日本文藝家協会も設立した。また、芥川賞、直木賞の設立者でもある。このように、菊池寛は当時の文学界に大きな影響を与えたが、現代では菊池寛の研究者が極めて少ない。それゆえ、菊池寛の作品を通して彼の文学観・人間観を再検討し、今日における菊池文学の意義を考え直してみたい。

『恩讐の彼方に』は大正八年に発表された代表作品の一つである。「恩讐」というテーマについての作品は、芥川龍之介の『或敵討の話』や森鷗外の『護持院ヶ原の敵討』などがある。菊池寛は芥川龍之介とは親友であり、互いに作品に対する影響があったと考えられる。

森鷗外の作品では敵討ちが成就しており、芥川龍之介にも菊池

寛にも影響を与えたが、三編の作品を比較すると、復讐の経緯と結末について違う点がある。この三編の作品を詳細に見ると、森鷗外、芥川龍之介、菊池寛のそれぞれの考え方と人間観が浮き彫りとなる。また、この比較によって、「個人主義、自由主義、人道主義を標榜していた」菊池寛の人生観の一端が見えると思われる。

そして、作品の中に登場する「青の洞門」もこの作品によって有名になった。「青の洞門」については他の作家も作品化しているが、菊池作品に見られる「お弓」のような女性は登場しない。芥川龍之介の『ある敵討の話』と森鷗外の『護持院ヶ原の敵討』の中にもお弓のような女性は登場しなかった。お弓の話は菊池寛独自の創作だと思われる。

元は優しい女性だったと思われるお弓が、お金のために残酷な女性になってしまうのだが、菊池寛はどうしてそのような女性が登場させたのか。この問題は菊池の女性観や金銭観が影響してい

るだろう。人生経験や人生観を創作に生かすことを重視していた菊池寛は自分の価値観を作品に投影させて物語を造形したのではないだろうか。そこで、後半では『恩讐の彼方に』に登場する女性像と金銭の問題を分析し、菊池寛の女性観と金銭観が作品に及ぼす影響とその意味を考察してみたい。

一、「敵討ち」とゴッテーム

『恩讐の彼方に』は、大正八年一月『中央公論』に発表された菊池寛の短編小説である。江戸時代後期に、豊前国の山国川沿いの耶馬溪にあつた交通の難所に、青の洞門を開削した実在の僧・禅海の史実に取材した作品である。『恩讐の彼方に』は敵討ちを材料とした有名な作品であり、菊池寛の歴史小説の代表作の一つでもある。菊池寛は「僕の歴史物語」の中で次のように述べている。

日本の文壇で、歴史小説は古くからあるが（中略）現代文学の歴史小説を初めて書いたのは、森鷗外博士である。鷗外博士の影響を受けて歴史小説を書いたものは自分と芥川龍之介であると思う。つまり歴史物語を現代小説の材料に使ったわけである。つまり、歴史的事件に新しい解釈を加えたのである。

菊池寛によると、菊池と芥川の歴史小説は森鷗外の影響を受けた事が分かる。森鷗外にも敵討ちを材料とする作品がい

くつかある。では、同じく敵討ちを材料としている『恩讐の彼方に』はどうだろうか。菊池の『恩讐の彼方に』は、鷗外と芥川の敵討ちの物語とどこが違うのか。『恩讐の彼方に』と他の作家のものを比較することで菊池文学の独自性が見えてくるのではないだろうか。

『恩讐の彼方に』が発表されてから一年三ヶ月後、芥川の『或敵討の話』（大九・五「雄弁」）が発表された。鷗外にも敵討ちを材料とした作品がいくつかあるが、芥川の『或敵討の話』は鷗外の『護寺院ヶ原の敵討』とよく似ている。それゆえ、この三編の作品を比較し分析してみたい。

まずは、『護寺院ヶ原の敵討』を通して、鷗外の敵討ちに対しての考え方を見てみたい。『護寺院ヶ原の敵討』の創作背景について尾形仿は次のように述べている。

あたかもこの明治四十年代から大正初年にかけて、明治四十二年啓成社から刊行された福本日南の『元禄快拳録』をトツプに、同四十四年の同書袖珍版、四十三年から四十四年に及ぶ鍋田崑山の『赤穂義人纂書』第一・第二・補遺、四十三年三田村玄竜の『元禄快拳別録』、四十五年村上浪六の『元禄忠魂録』、同じく上野静村の『赤穂義士譚』、同じく桃川燕林の講演筆記『赤穂義士四十七士伝』、同じく『日本武士道』第六編、赤穂義士、大正二年司馬僧正の『拙者は大石内蔵助ちや』、同じく植田均の『実録赤穂義士』、大正三年福本

日南の『元録快拳真相録』等が相次いで刊行を見た。

右によれば、当時において、これらの義士物が相次いで刊行され、武士道が強調されており、「敵討ち」を称揚するという風潮があったことが分かる。『護寺院ヶ原の敵討』は、大正二年九月二十日脱稿、同十月に発表された。『恩讐の彼方に』は大正八年一月に発表されており、『或敵討の話』は一年後の大正九年六月に発表されたのである。しかし、この三編の作品は同じ「敵討ち」を主題とする背景下に創作されたと言えるだろうか。この三編の作品を詳細に見ていくと、森鷗外、芥川龍之介、菊池寛のそれぞれの考え方と人間観がはつきり違っていることが分かるのだ。

明治四十五年七月三十日、明治国家の象徴であった天皇が崩御し、大正と改元された。山崎一穎（一）によると、乃木殉死だけではなく、衛生部人事に対しても、当時の歴史小説に対しても、官僚機構の内部にいた森鷗外は凡てのからくりを冷徹に見つめ、リアルでシニカルな目を光らせている。乃木殉死に多くの日本国民が悲しんだが、「鷗外は乃木殉死に対する批判の批判という形で、歴史小説に心情を吐露するに急であつた」。当時鷗外は幕藩体制の組織を動かす政治的人間を描きながら、組織の下であえぐ戦国武士の気質の崩壊を剔抉した。戦国武士の至純な魂に共感を覚えていた鷗外は『意地』を描きあげてから、自覚的な方法論で『護寺院ヶ原の敵討』を執筆し始めたのである。

菊池寛『恩讐の彼方に』管見——その材源と女性について——

『護寺院ヶ原の敵討』における復讐者のひとり宇平は、しっかりと敵討ちを主張していた九郎右衛門・りよ・文吉と違い、辛い敵討ちの旅に耐え難く、敵討ちに懐疑の念を発し、最後には敵討ちから離脱する。この宇平について「宇平の主張しているところは次の三点である。第一は敵討ちの成功性に対する疑問。第二は神仏の加護に対する疑問。そして第三は敵討ち制度そのものへの批判だ」と尾形氏は述べている。

尾形氏によれば、復讐者の宇平は敵討ちには懐疑を持ち、敵討ちに消極的な態度をもっているのだ。ところが、『護寺院ヶ原の敵討』の中の他の登場人物は皆敵を討つことを主張している。女としてのりよは尼になつても敵を討とうとする。敵討ちが一番消極的な宇平だったが、最初は「評議の席で一番熱心に復讐がしたいと言いつつ、成功を急いで気を苛つた」のであつた。成功を急ぐ気持ちは誰よりも強いからこそ、長く辛い敵討ちの道に耐え難いのだ。そのため結局宇平は行方不明になつたが、敵討ちを全面的に諦めたというわけでもない。この点から見れば、作者森鷗外の敵討ちに対する態度がはつきりと分かるだろう。消極的な遣り方を選んだため、宇平という人物は作中から消されたのだ。最後の褒美も彼には少しも関係がなかつたのだ。この結末からも、森鷗外は、敵討ちの脱落者としての宇平とは対極にあり、敵を討とうとする者を賞賛している事が分かるだろう。『護寺院ヶ原の敵討』の結末に対して、上野芳喜（芳喜）は次のように指摘している。

鵬外はここまで、苛酷な運命に強固な意志と信念を持って
対峙し乗り越えようとして勝利した「人間の原高貴性」輝く
ドラマを描き出して来たにも拘わらず、作品終末にはこれに
反する味気ない仇討後日譚を以て物語を結んだのであるが、
その対照は鮮やかである。

上野氏によると、敵討ちの旅の辛さを克服し、敵討ちを達成し
たことを「人間の原高貴性」として描いている。それと対照的
に、仇討後の後日譚がいかに味気ないことを述べたのだ。ここ
からも、人間が安逸な生活より、敵討ちをするために様々な苦勞
をするような生活を森鵬外は重視していることが分かるだろう。

また、この作品に似たものとして芥川の『或敵討の話』があ
る。これについては、芥川は鵬外の影響を受けて創作したとい
う先行論が多くあった。稲垣達郎は「歴史小説家としての芥川龍之
介」の中に「假に、この『後談』を除いて筆を擱いたとしたら、
恐らくは『護寺院ヶ原の敵討』にも比すべき作品が出来たかもし
れない」と述べている。稲垣論と前後して刊行された吉田精一は
『芥川龍之介』の中で「小説としてより、記録に近く、十分に題
材を消化しているとは思われない。内容は森鵬外の『護寺院ヶ原
の仇討』に極めてよく似ている。或は龍之介の念頭にあの作があ
ったのかもしれない」という同様の指摘がある。

このように、『或敵討の話』は内容が『護寺院ヶ原の敵討』と
似ているがゆえに、低く評価されたのである。一方、中田睦美は

『或敵討の話』試論^(註)の中で次のように指摘している。

七年前、芥川は確かに鵬外の『意地』を愛読し（大二・八
・一九、広瀬雄苑書簡）、鵬外の一連の歴史小説に深い関心
を抱いていた。しかし、いささか繁雑に過ぎるほど書簡を眺
めてきたように、この間、芥川の脳裏に鵬外の名前や作品が
去来した形跡は一切ない。しかも、芥川は新境地の現代小
説「秋」の成否や「素戔嗚命」の連載に心を砕いており、鵬
外の歴史小説と対峙してその向こうを張るといった余裕な
どなかったようにと思われる。（中略）注目すべきは、小説
「恩讐の彼方に」が一年余りのち菊池自身の手によつて脚色
され、大正九年三月二十六日から同三十日にかけて、つまり
「或敵討の話」の執筆直前に帝國劇場で上演されているとい
う事実である。（中略）

菊池の場合、敵討ちに旅立つのは実之助一人であり、同行
の犠牲者はなく、最後にはめでたく敵と邂逅、しかも互いに
手を取り合う。ここでは「恩讐」は涙と共に「彼方」に洗
い流され、「欣ばし」い抱擁となる。だが、実際の「敵討ち」
はそんなに生易しいものだったのか、と芥川は感じたのでは
あるまいか。（中略）「或敵討の話」は、親友菊池の「恩讐の
彼方に」に対する読後感に代えた芥川一流のアンサー・ソン
グだったように思える。

中田氏によると、『或敵討の話』は『護寺院ヶ原の敵討』に触

発されたのではなく、親友菊池寛の『恩讐の彼方に』に対するアンサー・ソングであった可能性が高い。が、いずれにしても、この三編の作品は互いに深く関わっていると考えて良いだろう。そこでこの三編の作品を簡単に比較し『恩讐の彼方に』の独自性を分析してみた。

『護寺院ヶ原の敵討』を通して、森鴎外は武士道肯定の観点から敵を討つという行為に賛美と重点を置いている。安逸な生活より、挑戦し続け、成就に至る人生をよしとするのである。では、『或敵討の話』と『恩讐の彼方に』はどうだろうか。

『或敵討の話』の結末には「大団円」というタイトルがつけられているが、これは本当の大団円とは言えないのではなからうか。求馬は敵討ちをめざしたが、辛い敵討ちに耐え難く遺恨を持って自殺した。甚大夫は敵ともども「痲病」に罹ったとき、双方の快癒を願ったが、それは自分と敵の兵衛のどちらかが死んだら敵討ちが成就しないという理由からの願いだつたのである。敵の死んだのを聞いてから甚大夫も息絶えたのだが、彼は自分の手で敵を殺せなかつたことを悔しく思っていただろう。敵討ちの旅は決して生易しいことではない、敵を討とうとしたら、痛ましい犠牲が無ければ出来ない。敵討ちというのは、鴎外が描いたように、諦めずに探し続ければ敵が見つかり、願いが実現するというように甘いものではない。また菊池が示すように、簡単に敵を許すわけでもなく、一生諦めずに敵を探しても敵打ちが出来ず、悔

恨を持つて死ぬこともある。これが芥川が『或敵討の話』を通して述べたかったことではないだろうか。鴎外と芥川の二編の作品は始めから終わりまではずっと敵討ちの話である。敵討ちの旅の辛さと寂しさを徹底的に表したのに対し、『恩讐の彼方に』は敵討ちを最後まで押し通す武士道精神が薄く、より人間性を持っているのだ。

『恩讐の彼方に』の中の実之助も宇平や求馬のように親の敵に対する憎しみが消えうせ「何の復讐であるか」と疑つたことがあるが、それは宇平や求馬とは違うのだ。宇平と求馬は敵討ちの旅の辛さに耐えがたく、脱落したのだが、実之助は「敵は、父を殺した罪の懺悔に、身心を粉に碎いて、半生を苦しみ抜いている。しかも、自分が一度名乗りかけると、唯々として、命を捨てよう」としていた「半死の老僧」を見て初めてそのような思いにとられるのだ。実之助の心の中に感動と同情の気持ちが生じたのではないだろうか。しかも、実之助もまた岩壁掘りに協力したのであるが、いっしょか実之助は改心した市九郎の姿や行動に感動して共に掘り進めたのである。これは『護寺院ヶ原の敵討』や『或敵討の話』の中の価値観では許されない行動だろう。

そして、敵の市九郎の女のお弓との採め事や、市九郎が改心してから完成した大業も『恩讐の彼方に』の独特の部分である。『護寺院ヶ原の敵討』と『或敵討の話』の中にはお弓のような女

性の登場人物は存在しないのだ。お弓との採め事についての描写は、ただ復讐の背景を説明するだけでなく、お弓の変化にも、お金によつて生活が狂わされる描写にも、市九郎が改心してからの変化についても作者は力点を置いたのだ。敵討ちの旅の辛さ、実之助の復讐の難しさ、実之助の心理描写も描いたが、相対的に言えば、菊池寛はこの作品の中で、「敵討ち」に力点を置いていないと言つてよいだろう。敵討ち小説というより、人間や社会に力点を置き、苦しい社会に生きる人間に焦点を当て、人間の持つ悪と善の物語、即ちヒューマニティーの物語を描こうとしたのではないだろうか。では次に『恩讐の彼方に』について詳しく分析してみたい。

二、『恩讐の彼方に』の創作背景について

なぜ菊池は『恩讐の彼方に』という小説を書いたか。そのきっかけは何であるのか。そして菊池はこの小説を通して読者に何を伝えたいのか。これらの問題についてそのモチベーションを中心として考察してみたい。例えば、江口渕は『或日の大石内蔵助』について『と題する回想の中で次のように述べている。

たしか大正六年の五月か六月のころだと覚えてゐる。菊池寛が「親のかたきを一生さがして歩いた男が、ようやく奥州の果てで目ざすかたきを探しあてたが、いざ向きあつて見るに、とせつかくのかたきはひどく落ちぶれ果てゐる上に、老いさ

らばつてよぼよぼになつてゐるので、かたきを打つ張り合がすっかりぬけてそのままかんべんしてやつたという話しを書こうと思うがどうだろう」といい出した。私（江口）と芥川とで「そりゃいいよ。ぜび書け」と大いにすすめた。

『恩讐の彼方に』は大正八年に発表されている。だが、こうして見ると、菊池は二年前には既に『恩讐の彼方に』と同様の構想の作品を書こうと考えていたようだ。では、菊池が最初に現行の『恩讐の彼方に』に直結するアイデアを得たきっかけは何であろうか。

菊池は後年の『歴史小説論』（『文藝講座』第二号、大正三・一〇）の中で「自分は此の話を耶馬溪の案内記で見たのである」と述べている。この述懐からすると、菊池が『恩讐の彼方に』という作品を創作したのは、まず耶馬溪の案内記で禅海の話を知り、その話の中から約二年前の構想との合致点を見出して、創作のインスピレーションを得たのだと思われる。では、ここに出てくる「耶馬溪の案内記」は一体どのような案内記であるのだろうか。片山宏行は「菊池が作品形成の基礎資料として用いたのは、小川古吉著『耶馬溪案内記』だったと見てはば間違いない」と指摘している。そして、片山氏は近藤浩一路の『耶馬溪見物』、千葉亀雄の『日本仇討物語』と田中貢太郎の「青の洞門物語」にも言及しているが、これらについてその可能性を検討してみたい。

まず近藤氏の著した紀行文『耶馬溪見物』の中には「青の洞

門」と「洞門の傳説」についての描写があるが、「伝説」についての叙述は極めて簡略である上、単行本『耶馬溪見物』は大正七年二月の刊行である。『恩讐の彼方に』発表の二年前に既にこの作品の構想をほぼ整えていた菊池が近藤氏の『耶馬溪見物』を参考した可能性は高くないと思われる。そして、田中氏の著した『奇話哀話』の中に収録された「青の洞門物語」（初出「中央公論」大六・一〇）は、市九郎が主人の内室（正妻）に狼籍を働こうとして主人に発見され、未遂に終つて恨みを抱き、親子三人が就寝中に忍びこんで主人を殺して逃げてしまう。その後、いろいろ悪事を重ねてから改心して隱道を掘ることを決意したという物語である。後半の部分は似ているが、前半の部分がかなり違っている。特に、主人の「寵妾」お弓と情を通じて二人で出奔するという菊池作品の前半核心部分が大きく異なっている。

そして、菊池が勤めていた時事新報社の上司でもあつた千葉氏の著した『日本仇討物語』^{（註）}であるが、千葉氏はただ当時の世間に広く伝えられていた伝承の梗概（別府の「日名子」氏から聞いた話）を描いただけで、その描写も簡略な粗筋である。物語の粹と肉付けはおおむね似ているが、二年前にもうこの作品を構想し終えていた菊池が、大正六年六月二十五日発行の『日本仇討物語』を参照した可能性は大きくない。千葉氏の話からすると、二人はそれぞれ別の材料からこの物語を知つて自分なりの作品を創作した可能性が高いと思われる。こうして見て来ると、菊池が『恩讐の

彼方に』という作品を創作したのは、近藤氏の『耶馬溪見物』や千葉氏の『日本仇討物語』との直接的な関係はあまり大きくないと考えられる。田中氏の「青の洞門物語」は参照した可能性もあるが、それとは別の材料にも注意する必要がある。

ところで、菊池は「自分は此の話を耶馬溪の案内記で見たのである」と確かに述べている。では、菊池の見たこの「耶馬溪の案内記」とは一体どれであるのか。「耶馬溪の案内記」というタイトルに従えば、小川氏の明治三九年に著した『耶馬溪案内記』と艸堂の大正二年刊行の『耶馬溪案内記』、この二冊である。では、菊池が作品形成の基礎資料として用いたのはどちらであるのだろうか。この二冊の『耶馬溪案内記』と『恩讐の彼方に』の三編の物語はおおむねその構造においてよく似ているが、主人公の主人を殺した理由と主人公の改心したきっかけについては大きく違っている。

小川氏の著した『耶馬溪案内記』^{（註）}は、全体が着実な史実だけを漢文脈で記した簡略なもので、主人公市九郎が主人を「暗殺して遁る」とあるだけで、殺した理由についての記述はない。が、主人公が改心したのは、携えた妻（出所不詳）の底知れない強欲に浅ましさを感じたためである。一方、艸堂の著した『耶馬溪案内記』^{（註）}の中に、主人公の主人を殺した理由について次のような話がある。

廿五才の頃志を立てて江戸に出で浅草の中川四郎兵衛と云

う旗本の仲間に住み込んだが痴情の果てから主人を斬って江戸を立退いた。

艸堂の著した『耶馬溪案内記』の中には、主人公の改心した理由についての描写はないが、痴情の果てから主人を殺したという描写がある。

『恩讐の彼方に』は大正八年に発表されたが、大正六年に作者はもうこの作品の構想を固めていた。だから、十三年前に刊行された小川氏の案内記より、時間的に接近している大正二年刊行の艸堂の『耶馬溪案内記』を参照した可能性がわずかに大きいのではないだろうか。ただし、小川氏の『耶馬溪案内記』と艸堂の『耶馬溪案内記』は二冊とも大分県内で出版され、全国に流通した可能性は乏しく、また、東京や京都などの大学図書館にも収録されていない。が、大正六年前後の菊池の活動範囲から見れば、菊池が艸堂の『耶馬溪案内記』に触れる可能性の方がより高かったと思われる。マント事件(大正二・四)後、菊池は共に第四次『新思潮』の同人でもあった成瀬正一(註)の家に寄宿していた。大正五年頃、菊池が時事新報社に入社してからも成瀬氏の家に寄食していた。その時、成瀬氏は九州大学の教員であった。艸堂の『耶馬溪案内記』はその九州大学図書館の伊都図(中央)B F 檜垣文庫に所蔵されている。この檜垣文庫の蔵書は九州大学教養部で国史学を担当していた檜垣元吉名誉教授(一九〇六—一九八八)の遺蔵資料なのである。一方、その中には明治三十八年に出版された

小川氏の『耶馬溪案内記』が所蔵されていない。それゆえ、上述のように、内容的にも、時間的にも、条件的にも、また成瀬との関係からしても、菊池が艸堂の『耶馬溪案内記』を読んだ可能性の方がより高いと考えられる。女の強欲が改心の契機となっている点からいえば、小川本を参照したとも言えるが、主人殺しの動機からいえば、艸堂本から示唆を得たとも言える。『恩讐の彼方に』の典拠とまでは言えないにしても、これまで言及されたことのない艸堂著の案内記を参考資料として検討材料に入れてもよいように思える。

三、お弓の存在

「青の洞門」をめぐる作品はいくつかあるが、それらを比較してみると、主人の寵妾であるお弓という人物の設定は菊池寛独自の創作であることが分かる。では、他の作品には見られないお弓を設定することで、菊池は『恩讐の彼方に』を通して何を伝えたかったのかについて考察してみた。

菊池の作品『恩讐の彼方に』で青の洞門は名高くなった。が、『恩讐の彼方に』について菊池は次のように語っている。(註)

「恩讐の彼方に」であるが、僕は耶馬溪などへ行つたことはない。案内記を見ると青の洞門のことがあるが、あの掘つた洞門などは、今は、さう大した重要な道ではないらしい。それから、あの中の木曾山中の話なども、昔の人の創作かも

しれないのである。

菊池自身の話によると菊池は耶馬溪などへ行ったことがない。無論隅外のように「歴史基儘」の再現をめざしたわけでもない。菊池はただ青の洞門という歴史的素材を借りて自分の思想を表し、作品を完成したかったと言えるだろう。

もちろんこの『恩讐の彼方に』の主題は基本的に敵討ちであるし、最後の洞窟掘りの大業の部分もおろそかにしてはいけないところだが、物語全体を総合的に見ると、菊池はその敵討ちに大きな力点を置いていないのではないか。それに、先にも述べたように、この作品では、主人の寵妾である女主人公のお弓の設定が「青の洞門」を素材とする他の作品とは異なる作者独自の創作であることが分かる。『恩讐の彼方に』の中では、他の主な登場人物が資料を典拠としているのに対し、妾のお弓だけが菊池の全くの創作なのだ。

では、菊池は参考資料にはないお弓という女性像をどのようなところから着想したのだろうか。たとえば当時の世相はどうであったろうか。

大正五年から、第一次世界大戦によって、米価の暴騰が起こり、一般市民の生活を苦しめ、新聞が連日、米の価格高騰を知らせ煽った事もあり、各地で米騒動が起こり、物価騰貴の影響などで事件も殖え、社会不安を増大させた。それに、当時「社会主義者の大杉榮が新しい女神近市子に斬られた」(大五・一一)や

菊池寛『恩讐の彼方に』管見——その材源と女性について——

「鎌子芳川家に帰る 縞毛布に醜骸を蔽ひて」(大六・四)等、女性についての犯罪や事件も社会で大きく注目を引いた。更に、大正五年以前には賣春婦についてのニュースなどがめつたになかったが、大正五、六年から賣春婦の問題は社会の注目を引き始めた。「妊娠した娼妓の運命」(大五・三)、「四千の賣春婦の更生どうする」(大五・五)、「賣春婦はどこへ 情性で正業は困難」(大六・二)等のニュースが引き続いて出たし、賣春撲滅運動も絶えず起こった。このように見ると、女性問題、特に生活困難のために賣春婦になった女性の問題は社会の注目を集めることになった。菊池のこうした社会問題に対する関心が参考資料には存在しない女性のお弓の造型を促し、賣春婦と大差のない境遇である「妾」という設定に結びついたのではあるまいか。

大正五年、『恩讐の彼方に』の原構想が固まる前年、時事新報社に入社していた菊池は、本意ながら「社会部」の記者として取材に追われていた。そうした中で、彼は当時注目を集めていた女性問題にも関心を抱き、お弓という底辺に生きる女性を描こうと考えたのではあるまいか。

お弓は市九郎が自分の命を賭して愛した女である。お弓ももとは優しい女であったと考えられるが、市九郎と情を通じて、主人殺しの片棒を担ぐことになった。お弓は「妾」の立場を捨てて出奔し、そのため金銭的保障を失い、生活に困って人生を狂わせることになった。そのためお弓は金銭観だけではなく、倫理観や人

格までが変わることになった。そのようなお弓を造形した背景には、菊池の女性観や金銭観が深く関わっているはずだ。そうしたお弓の存在を取り上げ分析することで、作者菊池寛の文学観を形成している女性観や金銭観もまた見えてくるところがあるのではないかと思われる。そこで以下では、お弓の経歴をめぐって彼女が元「茶屋の女中」であり、その後「妾」になったという社会的境遇などを中心に、具体的な資料をあげて検討してゆくつもりだが、紙数の関係などもあり、本稿はここでひとまず終えたい。続稿を期したい。

参考文献

- 註1 菊池寛『僕の歴史物語』昭和四年四月 平凡社版 『菊池寛全集』月報
- 註2 『森鴎外の歴史小説 史料と方法 護寺院原の敵討—その時代性について—』昭和五十四年十二月二十日 尾形仍 筑摩書房
- 註3 『森鴎外・歴史小説研究「鴎外文学における歴史意識」』山崎一 類著 昭和五十八年十月十日発行 桜楓社出版
- 註4 同註2
- 註5 『鴎外「護寺院原の敵討」論—「高貴な人間精神」の勝利の光芒 鮮やかな人間ドラマ—』上野芳喜 阪神近代文学研究会 平成七年七月
- 註6 『芥川龍之介研究』稲垣達郎 昭和十七年七月 河出書房 大正文学研究会

- 註7 『芥川龍之介』吉田精一 昭和十七年十二月 三省堂
- 註8 『或敵討の話—試論—』中田睦美 近畿大学文学芸学部論集「文学・芸術・文化」第二十二巻 第一号 平成二十三年三月
- 註9 『或日の大石内蔵助』について』江口渙 『芥川龍之介全集』第一巻「月報」昭和三十九年八月 筑摩書房
- 註10 片山宏行 『菊池寛のうしろ影』(第一部 十 善性) 平成十二年十一月二十日初版発行 発行所 未知谷
- 註11 『耶馬溪見物』近藤浩一路著 磯部甲陽堂 大正七年二月
- 註12 『奇話哀話』田中貢太郎 日新聞 大正八年十二月
- 註13 『千葉亀雄著作集』第四巻 千葉亀雄著 ゆまに書房発行 平成四年十二月十日
- 註14 『耶馬溪案内記』小川古吉著 東城井村(大分県) 明治三十九年十二月
- 註15 『耶馬溪案内記』 柳堂著 広津商店 大正二年五月
- 註16 成瀬正一(一八九二年四月二十六日—一九三六年四月十三日) は、日本のフランス文学者である。東京帝大在学中に芥川龍之介久米正雄、菊池寛、松岡譲と第四次『新思潮』を創刊する。また菊池の一高退学以降、菊池の学費や生活の工面を成瀬の父親が世話していた。
- 註17 『菊池寛全集 補巻 戯曲と小説』平成十一年二月十日発行 武蔵野書房
- 註18 『新聞集成大正編年史』(大正五〜六年版) 大正昭和新聞研究会 [編]